

## [研究ノート]

# COVID-19 の影響下での 老年看護学実習の代替実習における学生の学び

—課題レポートのテキストマイニングによる分析—

岡田 恭子・竹内 智子

## I. はじめに

近年の入院期間の短縮化や、医療機器の発達等による在宅医療・外来医療の推進、地域包括ケアシステム構築推進の中、療養する人々の生活の場は自宅や介護施設、学校等多様化している。看護職には地域で暮らす療養する人々を生活者と捉え、看護サービスを提供する役割が求められている<sup>1)</sup>。システム構築のための制度やシステムの整備と同様に、ケアを提供する人材育成は重要課題である。特に地域で暮らす高齢者の医療、介護予防、生活支援といった地域包括ケアができる能力の育成が必要とされている。

しかしながら、2020年以降の新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19とする）拡大に伴い、看護学教育への影響は大きく、必修とされている臨地実習が計画通りに実施できない状況が生じた。なかでも老年看護学領域では、利用者のCOVID-19感染後の重症化を懸念し、実習施設となる高齢者施設においては外部者の受け入れを制限するほかに手段がないとされていることから、臨地での実習を中止した大学が多いことが報告されている<sup>2) 3)</sup>。

A大学の老年看護学実習は、担当患者一人の看護過程の展開を目的とする高度急性期病院での2単位の実習と、認知症や重度の身体機能障害を併せ持ち介護老人保健施設に入所している高齢者、通所サービスを利用しながら在宅で生活している高齢者と関わるデイケア実習2単位を合わせた4単位の授業で構成されている。A大学においても、2020年度から2022年度までの3年間は介護老人保健施設実習とデイケア実習が全て中止となり、代替実習として学内演習へ全面的な切り替えを余儀なくされた。

コロナ禍における看護学生の臨地実習の代替実習については、事例患者による学内演習やオンライン実習など様々な実践報告、学生の学びや効果についての実践報告が増えてきている<sup>4) ~6)</sup>。しかし、高齢者施設における代替実習の学修方法に関する報告は少ない。COVID-19は第5類感染症に移行したが、高齢者をはじめとするハイリスク患者には引き続き十分な感染対策が必

受付日 2024.5.8

受理日 2024.5.30

所 属 福井県立大学看護福祉学部

要とされ、今後もCOVID-19等の感染症の流行時の高齢者施設における実習には制限が続くことが予測される。感染拡大の影響を受けながらも看護教育の質を担保していくことを目指すためには、新たな看護教育枠組みの構築や教育方法の見直しは喫緊の課題といえる。

本研究では、今後の看護教育の在り方を検討するために、デイケア実習の代替として行った学内演習における学生の学びを明らかにする。また、老年看護学の教育目的においてどのような意味があったのかを評価することを目的とする。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 研究対象

2020年度9月から3月にA大学看護学科3年次後期に老年看護学実習を履修した学生54名のうち、本研究に同意した50名の「老年看護学実習（学内演習）学びのレポート」を研究対象とした。研究の協力依頼は、老年看護学実習の成績評価を終えた4年次生の時点で実施した。

### 2. 研究期間

2021年5月6日～2023年10月31日

### 3. 老年看護学代替実習の概要

老年看護学実習は、従来高度急性期病院の病棟での患者の受持ち実習2単位、介護老人保健施設に入所している高齢者、通所サービスを利用しながら在宅で生活している高齢者と関わるデイケア実習2単位を合わせた4単位の授業科目となっている。COVID-19感染拡大に伴い、介護老人保健施設実習とデイケア実習の代替実習として学内演習を行った。2020年度の老年看護学実習の概要を表1に示す。

学内演習は、「地域包括ケアシステムにおける高齢者の生活をととのえる」、「認知症高齢者との関わりを理解する」の二つを目標とする演習内容を展開した。本研究は前者の演習についての報告である。演習目的・目標を以下に示す。

#### 1) 演習目的

- (1) 不可逆的な健康障害を有する高齢者が住み慣れた地域で生活を可能にするための支援のあり方を学ぶ。
- (2) 健康障害を有する高齢者と同居する家族を理解し家族のQOLを維持する支援を学ぶ。
- (3) 高齢者と家族が地域での生活を可能にするために、施設や職種間の連携について学ぶ。

#### 2) 演習目標

- (1) 地域包括ケアシステムが謳われてきた背景と強化に向けた取り組みについて理解できる。
  - ①地域包括ケアシステムについて理解する。

- ②地域共生型社会の実現に向けた取り組みの推進について理解する。
  - ③病床機能報告制度の背景と地域包括ケアシステムの連関を理解する。
  - ④地域包括ケアシステムにおける各種医療機能が果たす役割について理解する。
  - ⑤2025年問題と高齢者の世帯構成の変化、地域包括ケアシステムの連関を理解する。
  - ⑥地域包括ケアシステムの一環として行われている全国的な取り組みと対象事例の地域の取り組みの実際を理解する。
- (2) 要介護高齢者を介護する家族の生活の実態を理解する。
- ①介護負担の実際に関する動向を理解する。
  - ②要介護高齢者を介護する家族を支援するシステムや課題を理解する。
- (3) 介護保険制度や施設サービスの実際について理解する。
- ①高齢者の生活を支える各種施設サービスの特徴を理解する。
  - ②地域包括ケアシステムにおける各種高齢者施設の機能と課題を理解する。
  - ③2018年介護保険法改正における介護老人保健施設の在宅復帰・在宅支援機能を理解する。

表 1. 2020 年度老年看護実習の概要

	実習 1 日目	実習2日目	実習3日目	実習4日目	実習5日目
第1週	病院実習オリエンテーション 患者紹介	病院実習 臨地	病院実習 学内日	病院実習 臨地 看護計画発表会	病院実習 臨地
2週	実習6日目 病院実習 臨地	実習7日目 病院実習 臨地	実習8日目 病院実習 臨地	実習9日目 病院実習 臨地 病棟報告会	実習10日目 病院実習まとめ 学内
3週	実習 11日目 学内演習オリエンテーション	実習 12日目 地域包括演習 グループワーク ①調べ学習と共有 グループ発表	実習 13日目 地域包括演習 個別学習 ②担当患者の退院後の支 援計画立案	実習 14日目 地域包括演習 グループワーク ③支援計画のディス カッション	実習 15日目 地域包括演習 グループ発表
4週	実習 16日目 認知症ケア演習 オリエンテーション	実習 17日目 認知症ケア演習 グループワーク ①認知症に関する 映画鑑賞	実習 18日目 認知症ケア演習 グループワーク ②認知症の人の関わり 方を考える	実習 19日目 認知症ケア演習 グループ発表	実習20日目 学内演習 学びのレポート作成

### 3) 演習方法

10名前後の実習グループの学生を3名から4名の3グループに分け、学生個々に高度急性期病院で体験したことをグループメンバーに伝え、相互に自分の考えを伝え合いメンバーの考えをまとめてグループで発表し合うことを演習課題とした。

グループワークでは、高度急性期病院で担当した患者の関わりを活用し、退院後の患者が住み慣れた地域で生活を可能にするために、どのような施設や専門職の支援があるのかを想定しながら進めた。グループワークの前に、地域包括ケアシステムに関する制度や社会資源について、さらに学生自身が居住する地域の社会資源をグループで調べる時間を設けた。グループワー

クでは、「担当した患者が住み慣れた地域で健康を維持し、家族も含めてQOLを低下させることなく過ごせるようになるために必要な、医療、介護サービス、地域資源について」のディスカッションを行った。ディスカッションのまとめとして、「高齢者と家族の地域での生活を可能にするための高度急性期病院の看護師の役割」をグループ課題として提示した。学生は、グループワーク、他グループの発表を終えて、演習目的に対する自身の学びをまとめてレポートを作成した。

#### 4. 分析方法

学生のレポートの記述内容をテキストデータとして、KH Coder (Ver.3) を用いてテキストマイニングを行った。KH Coderにおける計量テキスト分析は、計量的分析手法を用いてテキスト型のデータを整理または分析し、内容分析を行う方法である<sup>7)</sup>。

まず、抽出語リストで出現回数の多い語を確認し、自動抽出でうまく1つの語として抽出されていない「高度」「急性期」「病院」を分析に利用したい語として強制抽出語に指定した。また、事前に共起ネットワーク分析を実施したところ、「考える」の抽出語が他の抽出語と強く共起しており、共起ネットワークの解釈性を低下させることが判明した。そのため、「考える」を除外語として設定し、分析対象語から除外されるようにした。

次に、レポートがどのような話題で構成されているかを検討するため、共起ネットワーク図を作成した。共起ネットワークは語の位置に意味はなく、線でつながっているかどうかの意味を成し、強い共起関係ほど濃い線で描写される。検出されたグループに含まれるテキストは、KWICコンコーダンスのコマンドで確認し、抽出語の用いられていた文脈での意味内容を確認しながらネーミングを行った。なお、分析の過程においては、KH Coderの開発者のセミナーを受講した研究者2名で検討し、解釈の妥当性の確保に努めた。

#### 5. 倫理的配慮

学生への研究協力の依頼は、老年看護学実習の成績評価を終えた時点の4年次生に、文書と口頭で本研究の目的、意義、方法、倫理的配慮、研究への参加は自由意志であり、研究しないことによる不利益はないこと、および研究結果を公表することを説明した。本研究は福井県立大学研究等における人権擁護、倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：2021003号）。本研究における利益相反は存在しない。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 抽出語句

テキストマイニングの結果、文書数は936文、すべての語の延べ数を示す総抽出語数（使用

後数)は44,185(18,759)、何種類の語が含まれているかを示す異なり語数(使用語数)2,071(1,703)であった。なお、(使用語数)は助詞や助動詞のように、どのような文章の中にも

表 2. 頻出語句上位 100 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
患者	725	支援	101	早期	52	負担	37
家族	435	利用	93	職種	51	関わる	36
必要	363	力	92	決定	50	時間	35
病院	336	高齢	85	疾患	50	高い	34
看護	323	回復	83	把握	50	問題	34
生活	314	本人	77	リハビリ	49	ワーク	32
急性期	273	自宅	73	選択	49	胃	32
退院	249	アセスメント	70	知識	49	支える	32
介護	240	場合	70	保険	49	他	32
入院	232	前	69	ADL	48	思う	31
転院	227	在宅	67	持つ	47	見据える	30
高度	224	社会	67	身体	46	知る	30
情報	211	意思	63	援助	45	抱える	30
理解	191	連携	63	思い	45	慢性	30
機能	176	重要	62	戻る	45	瘻	30
医療	172	病床	62	病棟	42	安定	29
行う	171	受ける	61	意向	41	環境	29
地域	160	調整	61	制度	41	希望	29
サービス	157	収集	57	多い	41	求める	29
状態	135	分かる	57	治療	40	自分	29
今後	119	グループ	56	学ぶ	39	大切	29
提供	117	障害	56	可能	38	認定	29
施設	113	役割	55	経済	37	向ける	28
状況	110	資源	53	今回	37	受け持つ	27
ケア	106	共有	52	生きる	37	特に	27

表 3. 品詞別頻出語 (上位 20 語)

名詞	出現回数	サ変名詞	出現回数	形容動詞	出現回数
患者	725	看護	323	必要	363
家族	435	生活	314	重要	62
転院	227	退院	249	可能	38
情報	211	介護	240	安定	29
医療	172	入院	232	大切	29
地域	160	理解	191	様々	26
状態	135	機能	176	適切	24
状況	110	サービス	157	不安	23
ケア	106	提供	117	困難	22
高齢	85	施設	113	十分	11
本人	77	支援	101	健康	10
自宅	73	利用	93	スムーズ	9
アセスメント	70	回復	83	不可欠	8
社会	67	在宅	67	安全	7
病床	62	意思	63	同様	6
グループ	56	連携	63	明確	6
障害	56	調整	61	個別	5
役割	55	収集	57	最適	5
資源	53	共有	52	主	5
早期	52	決定	50	新た	5

あらわれる一般的な語KH Coderが認識して除外した結果、使用されている語数を示す<sup>8)</sup>。

総抽出語のうち出現回数の多い上位100位を表2に示す。また、品詞別抽出語(名詞、サ変名詞、形容動詞)のうち、多く使用された上位20語を表3に示す。

## 2. 共起ネットワーク分析

抽出語同士の結びつきの関係性を知るために、描写設定は、最小出現数を40、上位60とし、共起ネットワークを作成した。分析の結果、7つのグループに分類された。なお、「」には抽出された単語、【】にはネットワークの名称を示す。また、レポートの記述内容は<>で表記した。(図1)

### 1) グループ①【患者に必要な支援を理解する】

「患者」「必要」「看護」などを中心とするグループは、<目の前の患者の状態を観察、把握し、その患者に必要な看護ケアをアセスメントし実践する>、<患者の疾患だけではなく、その疾患の予後や患者の置かれている状況について詳しく理解している必要がある>といった記述内容から構成されていた。

### 2) グループ②【家族と情報を共有する】

「家族」「情報」「提供」などを中心とするグループは、<入院前の家族のサポート状況、家族の今後の介護方針、経済保障について情報収集し、家族の介護力や患者さんに合った施設や病院、支援についてアセスメントする><今後必要な医療の情報提供をして、家族の希望を聞くことで、医学的な視点と家族の要望を含めた選択につながった>、<突然の判断を迫られる家族の意思決定を支援するためには、選択肢とそれぞれのメリット、デメリットなどの情報提供を細かく行い、家族がより良い選択をできるようにする必要がある>といった記述内容から構成されていた。

### 3) グループ③【退院・転院後の生活を見据えた看護】

「生活」「入院」「退院」「転院」などを中心とするグループは、<患者の入院時から地域の病院と連携または自宅退院への調整を行い、多職種連携を行いながら患者さんが少しでも入院前の生活に戻れるように支援していかなければならない>、<高度急性期病院では急性期の患者さんに対して常に受入可能な状況を維持しておかなければならないため、看護師は入院時から退院・転院後の生活を考えたケアを行っていかなければならない>、<患者に特に近い存在である看護師が退院後の生活を見据えながら関わることにより、患者が不自由なく退院後の生活を過ごすことに繋げることができる>といった記述内容から構成されていた。

### 4) グループ④【地域で利用できる介護サービスについて理解する】

「介護」「サービス」「利用」などを中心とするグループは、<入院前の患者・家族・介護サービス利用等の情報を理解しておくことが転院・退院調整を行っていくうえで必要となる>、<

入院中の経過を踏まえて、退院後のサービスは何が適しているかを考えたり、居住地に利用できる施設・サービスがあるかを検討するために、地域の介護サービスについて理解している必要がある>といった記述内容から構成されていた。

#### 5) グループ⑤【病院内外における多職種連携】

「ケア」「連携」「職種」を中心とするグループは、<情報を医師・PT・OT・STなど様々な職種と共有し、連携をはかる役割も担っている>、<患者や家族が無理なく療養生活を送ることができるように、地域の関連機関や職種と連携する役割を持つ>、<多職種と連携し情報共有を行い、共通の目標をもって患者や家族に関わることが大切>といった記述内容から構成されていた。

#### 6) グループ⑥【社会資源の活用】

「社会」「資源」を中心とするグループは、<本人・ご家族の意向を聞き、その人に合った社会資源を提供する>、<入院中の患者との関わりから患者ができていた生活動作を見出し、疾患の状態とすり合わせて患者に合った社会資源を提供していくことが必要>、<転院・退院後に住み慣れた地域で生活を送っていくためにどんなサービスや社会資源が必要か早期に判断する役割を担っている>といった記述内容から構成されていた。

#### 7) グループ⑦【患者・家族の意思決定支援】

「意思」「決定」を中心とするグループは、<家族が限られた時間の中で納得した決断ができるように、看護師は家族の苦悩を受け止めたうえで、代理意思決定に必要な情報を家族に十分

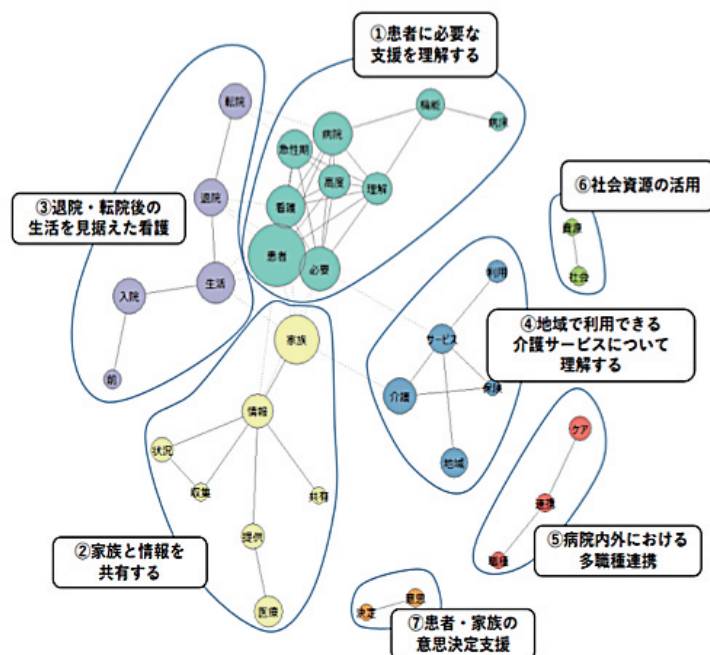


図1. 共起ネットワーク図

伝える必要がある>、＜代理意思決定の際は家族の不安や葛藤を理解しながら、患者・家族にとって最善の意思決定ができるように必要な知識や情報を提供する>といった記述内容から構成されていた。

#### IV. 考察

本研究の目的は、コロナ禍における老年看護学実習の代替実習による学生の学びを明らかにすることである。学内演習では、高度急性期病院で担当した患者との関わりを活用し、またグループメンバーが学びを共有する「協同学習」を取り入れた。演習の課題レポートの記述内容をKH Coderを用いてテキストマイニングを行った。以下、学内演習における学生の学びについて、演習目標から二つの視点で考察する。

##### 1. 健康障害を有する高齢者とその家族のQOLを維持する支援に関する学び

共起ネットワークの結果から、健康障害を有する高齢者とその家族のQOLを維持する支援に関して、【患者に必要な支援を理解する】【家族と情報を共有する】【患者・家族の意思決定支援】が学びとして得られていた。

学生は、患者の疾患や身体状態を理解するだけではなく、疾患により不可逆的な障害を有する患者や家族の葛藤や不安といった心理状態、家族の介護力や利用している社会資源といった社会面の状態を把握することが必要であることを学んでいた。患者の全体像を捉えることで、患者と家族の生活や介護上の課題を理解し、【患者に必要な支援を理解する】ことに繋がっていたことが推測される。

患者の入退院支援では、生活をみる視点と健康問題を支援する視点を併せ持つ看護師が、その専門性を発揮し、意思決定の過程を支援することが求められている<sup>9)</sup>。看護師は、患者が疾患により何らかの健康障害を有することとなった場合、治療内容や病状、今後の療養生活のイメージを本人と家族、医療と介護に関わる専門職とで共有し、今後の生活の過ごし方について本人が意思決定できるように支援する必要がある。＜入院前の家族のサポート状況、家族の今後の介護方針、経済保障について情報収集し、家族の介護力や患者さんに合った施設や病院、支援についてアセスメントする>、＜今後必要な医療の情報提供をして、家族の希望を聞くことで、医学的な視点と家族の要望を含めた選択につながった>という記述内容からも、学生は、疾患や身体面、心理・社会面から患者の全体像を捉えることのできる看護師だからこそ、退院後の生活に向けた意思決定の支援を行うという役割を担っていることを理解していたと考える。

高齢者は、認知機能の低下や全身状態が急速に悪化することも多く、自分の意思表出が困難になることも多い。青木は、意思疎通困難な高齢者を支える家族の代理意思決定に関して、高齢者の場合は残りの人生が見えているからこそ、生き長らえるよりもQOLについて家族が悩

み、断ち切れない絆といった、高齢者との長期におよぶ関係性が代理意思決定の難しさがあると述べている<sup>10)</sup>。高齢者の地域生活支援においては、健康障害を有する高齢者とその家族が、どのような場所で、どのように生活していくのか、本人や家族のQOLを維持する支援が重要である。学生は、退院後の生活において＜突然の判断を迫られる家族の意思決定を支援するためには、選択肢とそれぞれのメリット、デメリットなどの情報提供を細かく行い、家族がより良い選択をできるようにする必要がある＞と、【家族と情報を共有する】ことの重要性を述べていた。本人や家族、医療と介護の専門職と相談しながら、【患者・家族の意思決定支援】に携わっていくことの必要性について理解できていたと考える。

## 2. 健康障害を有する高齢者の地域生活を可能にするための支援のあり方に関する学び

【退院・転院後の生活を見据えた看護】【地域で利用できる介護サービスについて理解する】【社会資源の活用】【病院内外における多職種連携】が学びとして得られていた。

演習では、グループディスカッションの前に、地域包括ケアシステムに関する制度や社会資源について、さらに、学生自身が居住する地域の社会資源をグループで調べる時間を設けた。このような学習の進め方は、＜高度急性期病院では急性期の患者さんに対して常に受入可能な状況を維持しておかなければならないため、看護師は入院時から退院・転院後の生活を考えたケアを行っていかねばならない＞の記述内容が示すように、地域包括ケアの必要性の理解を促すことに効果的であったと考える。

現在の看護は、入院中の看護、退院支援、在宅看護などと、場や時期によって支援が分断されることが多い。しかし、高齢者や家族にとっては、療養の場が変わっても生活は継続している<sup>12)</sup>。学生は、高齢者の地域生活を可能にするための支援として、【地域で利用できる介護サービスについて理解する】【社会資源の活用】といった患者の居住地域にある資源の理解と、健康障害の程度や家族の介護力などから、地域での生活に必要な社会資源をアセスメントすることが必要であることを理解していた。さらに、地域生活の支援のためには、看護師は医療や介護の専門職と共通の目的を持ち、【病院内外における多職種連携】を行う役割を担うことを理解していた。学生は、高度急性期病院で担当した患者の退院後の生活を想定しながら演習を進めたことで、病院完結型の医療ではなく、入院時から高齢者と家族の地域での生活を見据えて、保健・医療・福祉の多機関が連携して切れ目のない支援を行うことが必要であると学ぶことができたと考える。

## 3. 看護教育への示唆

A大学では、高齢者施設実習の中止に伴い、「地域包括ケアシステムにおける高齢者の生活をととのえる」看護について学ぶことを目的とした学内演習を実施した。従来の老年看護学実

習の介護老人保健施設実習では、要介護高齢者への直接援助をととして、またデイケア実習では送迎に同行し、高齢者と家族の療養環境を実際に見ることで、地域包括ケアシステムにおける高齢者施設の役割を学ぶことができる。本研究の結果からは、従来の高齢者施設実習と同様の目的である、高齢者と家族の地域生活を実現するために必要な看護師の視点を中心に学びを得られていたことがわかった。

看護学の実習教育の場面では、学生は対象との関わりを中心にした様々な体験をし、自分なりに自身の体験に意味づけしていく学習活動を行っている。さらに、学生は「体験」を省察することで「経験知」へと学びに変える<sup>13)</sup>。これらの学びが得られたのは、経験していない担当患者の退院後の生活を想定するために、高度急性期病院実習で体験した「退院・転院」に問題意識を置いて演習を展開したことが効果的であったといえる。学生は対象との関わりが持てない演習のなかで、高度急性期病院実習での体験に価値をおくことで、学ぶべき内容に関連性を見出すことができたと考ええる。

老年看護学実習を学内演習に変更したことで、学生は、高齢者との直接的な関わりから得る学びの不足や、病院で実習できないことによる不安を抱えていることが報告されている<sup>14)</sup>。今後も、高齢者をはじめとするハイリスク患者には引き続き十分な感染対策が必要とされ、COVID-19等の感染拡大時の高齢者施設における実習実施には制限が続くことが予測される。実習施設の状況に合わせて、可能な限り実習目的を達成するためには、シミュレーションシステムを用いた演習や、実習指導者や実習施設の他職種とオンラインや対面で協力を得ながら臨床の状況を学ぶことができるように、学習環境の整備を行うことが必要である。

#### 4. 本研究の限界と課題

本研究の分析対象は、課題レポートの記述内容が学生の文章能力に委ねられていることから演習での学びを十分に表現しきれていないことが考えられる。また、本研究では従来の介護老人保健施設・デイケア施設の実習との比較は行っていない。したがって、今後は実習形態の違いによる学習効果の評価について検討していくことが課題である。

#### V. 結論

本研究は、COVID-19の感染拡大下における高齢者施設実習の代替実習における学生の学びについて、KH Coderを用いてテキストマイニングを行い、今後の看護教育の在り方を検討した。

学生は、「地域包括ケアシステムにおける高齢者の生活をととのえる」ためには、【患者に必要な支援を理解する】【家族と情報を共有する】【患者・家族の意思決定支援】といった健康障害を有する高齢者とその家族のQOLを維持する支援について学んでいた。また、健康障害を

有する高齢者の地域生活を可能にするための支援として【退院・転院後の生活を見据えた看護】【地域で利用できる介護サービスについて理解する】【社会資源の活用】【病院内外における多職種連携】が必要であることが学びとして示され、学内演習であっても一定の学修効果が得られていた。

老年看護学における臨地実習において、施設の受け入れ状況に合わせて協力を得ながら、可能な限り臨床の状況を学ぶことができるように、オンラインや学内で学修ができる方法を検討する必要がある。

## 引用・参考文献

- 1) 厚生労働省：第10回看護基礎教育検討会報告書（令和元年9月）<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>（2023.10.24閲覧）
- 2) 一般社団法人日本看護系大学協議会：日本看護系大学協議会 看護学教育質向上委員会 2020年度COVID-19に伴う看護学実習への影響調査A調査・B調査報告書<https://www.janpu.or.jp/2021/04/30/18506/>（2023.5.8閲覧）
- 3) 木村弘子，千原智美：新型コロナウイルス感染症の流行下における学内代替実習の現状と課題－介護実習と教育実習において－，甲子園短期大学紀要，39，53-58，2021.
- 4) 宇野真由美，横山友子，隅田千絵他：新型コロナウイルスの影響下における基礎 看護学実習Ⅱ：教員からみた学内代替実習の学習効果の検討，四條畷学園大学看護ジャーナル，5，17-24，2022.
- 5) 大島和子，齊藤みどり：コロナ禍における成人看護学実習Ⅰ（慢性看護学実習）第2報－学内実習を主体とした代替実習の効果－，了徳寺大学研究紀要，16，205-218，2022.
- 7) 長聡子，西村春香，萩原智子：オンラインを用いた老年看護学実習における学びと課題，産業医科大学雑誌，44(2)，203-213，2022.
- 8) 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して（第2版），1-2，ナカニシヤ出版，京都，2022.
- 9) 樋口耕一，中村康則，周景龍：動かして学ぶ！はじめてのテキストマイニング フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析（国社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して（初版）28-35，ナカニシヤ出版，京都，2022.
- 10) 藤澤まこと：ナースが行う入退院支援 患者・家族のその人らしく生きるを支えるために，46-48，メジカルフレンド社，東京，2020.
- 11) 青木頼子：意思疎通困難な高齢者を支える家族の代理意思決定に関する文献レビュー，富山大学看護学会誌，14（2），121-144，2014.
- 12) 坂井志麻：地域包括ケアにおける入退院支援，老年看護学，24（2），3-4，2020.
- 13) 佐藤みつ子：看護学実習指導の神髄－経験学習モデルによる分析から実習指導の本質を探る－，看護教育研究学会誌，12（1），77-85，2019.
- 14) 田端真，清水律子，竹村和誠他：新型コロナウイルス感染症により老年看護学実習を学内実習とした取り組みと学生アンケートからの考察，三重県立看護大学紀要，特別号，72-80，2020.